

令和6年12月定例研究会 発表希望要旨

曹洞宗総合研究センター宗学研究部門研究員 / 東日本支部参事

山内弾正

「曹洞宗僧侶・来馬琢道の仏教音楽活動について ―正則音楽講習所を中心に―」

明治初頭の仏教界では西洋音楽を用いた教化活動が展開され、仏教と音楽を結びつける「仏教音楽」活動が本格化した。特に明治22年に発足した「仏教唱歌会」はその嚆矢とも言うべき活動を展開し、五線譜に仏教由来の歌詞を加えた初の歌集として『仏教唱歌集第一』などを刊行した。発足には浄土宗僧侶の岩井智海(1863～1942)の他に、『音楽雑誌』を創始した四釜訥治(1854～1928)ら関わった。所属会員は数百名におよび、名誉会員として各宗派の代表者や政府要人が名前を連ねていた一方で、活動期間は限定的であったと見られる。この期間に岩井は『仏教音楽論』などを刊行したが、その後は目立った音楽活動を展開するに至らなかった。

従来の仏教音楽研究で見過ごされている人物に曹洞宗僧侶の来馬琢道(1877～1964)がいる。来馬はその生涯で一貫して布教教化に積極的な姿勢を見せ、出版事業に携わる中で多くの著作を残した。曹洞宗学にも通じ、代表作である『禅門宝鑑』は現在の曹洞宗儀礼に大きな影響を及ぼしている。また、浅草区議会議員などを経て、第一回参議院議員選挙に当選した。近年の研究では、仏前結婚式を進めた人物として紹介されることが多い。

本発表では、来馬の開設した「正則音楽講習所」に焦点をあてる。岩井の音楽活動が限定的であったと見られる一方で、来馬による活動は明治35年頃に始まり、その後も音楽教化に取り組む姿勢は一貫して高い。中でも明治37年に浅草万隆寺の境内に開かれた「正則音楽講習所」は、日本で初めて寺院の運営した音楽教習所であったと思われる。この顧問を務めたのが、日本初の私立音楽学校を創始した山田源一郎(1869～1927)であった。「正則音楽講習所」は明治42年時点で浅草区唯一の洋楽教授所として数えられており、活動期間は少なくとも大正6年の頃まで下ると思われる。本発表では、来馬の仏教音楽活動を紐解くことで、明治期における仏教音楽史の一端を明らかにすることを目的とする。